巻頭言

JABEEと自由の学風

理事・京都大学教授　鉾井修一

今、大学では教育に関する話題に事欠かない。京都大学も例外ではない。などと書くなど数年前には想像だにしなかったが、京都大学においても「研究・教育」ではなく、「教育・研究」である。

建築教育に関連する一つの大きな動きは工学教育の見直しである。JABEE（Japan Accreditation Board for Engineering Education、日本技術者教育認定機構）がそれを端的に示すものである。JABEEそのものは技術者教育プログラムの審査・認定を行う非政府団体であるが、今やこのシステム全体を表現する言葉として使われている。単純に言うと教育機関が提供する教育プログラムを評価する仕組みである。大学内部から自発的に出てきたものではない。大学が工学知識とスキルを身につけた学生を社会に送り出すようにと、大学が申請する教育プログラムを評価し認定するシステムであり、実務の側が要求している（するであろう）ものである。アメリカの実務的な工学教育と契約に対する思想が、日本に浸透してきたものと捉えている。プログラムの認定は、それを提供する教育機関を評価することになるから、自らの大学をアピールする良い機会とも言える。

教育プログラムの認定を受けるためには、どのような学習・教育目標を持っているのか、必要な学習・教育の量を満たしているか、学習達成度をどのように評価し、欠点があればどのようにそれをフィードバックするのか、などの基準を満足する必要がある。その際の大きな特徴は、以上の事項を明文化し公開しなければならないことである。

授業ひとつとっても、科目全体の構成と各回の授業内容を丁寧に記述したシラバスが要求され、授業は学生や第三者によって評価される。一昔前までの大学、特に京都大学では考えられなかったことである。このようなやり方に対する賛否はあろうが、メリットをあげるならば、学生および教員の意識の変化であろう。学生にとってみれば、毎回その日の学習目標が提示され今日は何を勉強するかが明確になるため、これまでの他大学における例では評判は良い。きっちりとした授業計画が必要となるから、教える側にとっては教えるときの心構えが変わってくる。

このような教育システムは京大の自由な学風に合わないのだろうか。京大生を十把一絡げで論ずることが多いが、京大生にも当然分布がある。非常に優秀な学生もいればドロップアウトする学生もいるが、やはり多くはそこそこ優秀だが強烈な何かをまだ発散していない学生である。JABEEがターゲットとするのはこの中間層と考えられる。非常に優秀でやる気のある学生は、JABEEの有無に拘わらず自分でことを進めていくであろう。その際、JABEEシステムが提供する教育内容は簡単な基礎となり、さらっとマスターしそれを肥や

しにして自分の世界を構築できる人間である。中間層は、本来かなり高い能力を有してはいるが、必ずしも明確な方向性を持っていない学生と考えられる。JABEEはこれらの学生に一つの明確な方法を提示し、最終的な方向性を定める手助けとなるであろう。第三番目の層は実は色々な意味で深刻な問題を孕んでいるのだが、JABEEとの直接的な関係は薄いのでここでは触れない。

こう考えると、JABEEは自由な学風をそれほど妨げないのではないか。むしろ問題は、教育における創意工夫を面倒がる一部の教師の側にあるのではないか。というわけで、十年一日の授業をしている怠惰な私としては、言い訳が思いつかず困っている次第である。

JABEEのもう一つの特徴に評価がある。これは教育現場に限ったことではなく、社会の様々な場面で登場している。法人化した旧国立大学における代表的な例が、大学が実行した教育・研究の評価結果に基づく運用交付金の査定である。

教育・研究に対する基礎年金的な意味を持つ運用交付金を得るため、そして減らされないようにするためには、種々のハードルを越えなければならない。その一つは勿論研究業績であるが、同時に教育に力を注ぎ授業を通して能力ある学生を育て社会に輩出することが要求され、それが評価される。学生にしっかりと工学の基礎と考える能力を身につけさせねばならず、そのような学生を輩出したか否かが評価される。評価が難しいからといってそれから逃れることはできず、自ら評価するシステムを考えなければならない。大学教員には（にも？）これまでとは異なる努力が要求されている。